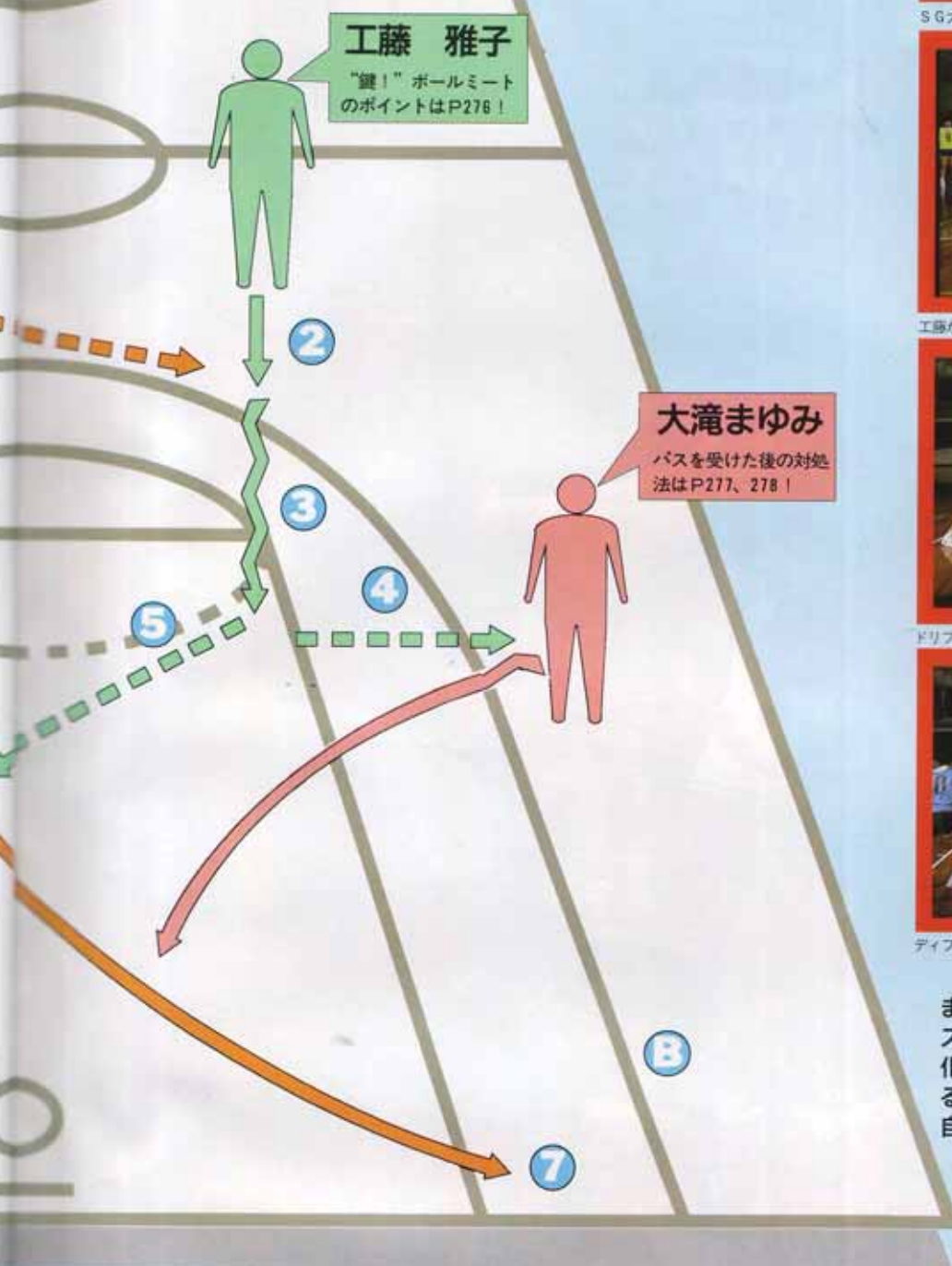


MOTION

オフェンスの威力



工藤 雅子
 “鍵!” ボールミートのポイントはP276!

大滝まゆみ
 パスを受けた後の対処法はP277、278!



SG大野がPG工藤にパス。工藤の受け方が大事なポイントである



工藤が1の位置から勢いよく前に出てミート。なんでもできる態勢だ



ドリブルでディフェンスを中央に固めておいて45度の位置にいる大滝へ



ディフェンスがあわてて飛び出してくれば、ドライブインがうってつけ

まず最初に、鶴鳴女のモーション・オフェンスの例を二つ紹介しよう。決して、パターン化されたものではない。状況に応じて行われる、一人ひとりの“駆け引き”の巧さが変幻自在なシステムを機能させているのである。

上の写真は4対4のゾーンを攻めているシーンである。右の①②③④のカットがセンターフォワード・大滝の45度からのドライブ、左の⑤⑥⑦はセカンドガード・大野のパスを出してからの一連の動きを示している。順に注釈を加えていこう。

まず、①で大野が強いパスを工藤に出す。どうすれば強いパスを出せるかは、②の工藤のボールのもらい方で説明できる。工藤のドリブルの上から引いてあるのは、彼女が前に出てボールミートしているのを示している。こうして勢いをつけることによって右45度の位置にいる大滝や日の副田にも素早いパスが可能になる。当然、そのパスを受ける側も工藤と同じように、受ける準備が求められる。

さて、②のボールミートは当然、ディフェンスの位置によって決まる。②でノーマークの状況だったらもちろんシュート。③ではディフェンスを中央に追いやり、右45度でパスを持ち構える大滝へのパスを示している。

攻撃に欠かせないことは、ディフェンス形態を変化させること。つまり、左右に大きく揺さぶったり、一点に収縮させることによってフリーなスペースを作ることだ。③ではディフェンス3人がペイント内で一本のラインで結べる状態。そこで、工藤はアウトサイドにいる大滝へパスを出したのだ。そして、④でディフェンスがあわてて前に出てくる。つまり、今度は縦に揺さぶられているのだ。大滝も工藤と同様に前に出てミートするため、ワンドリブルでリングまでドライブできるのだ。

今度は、⑤⑥⑦に目を移そう。左45度には大野がリングに向かってカットして、ポストに立つシーンだ。

鶴鳴女には、パスを出した後の動作